

■音楽系の部活動の今を探る

# 中学校吹奏楽部に関する8つの所感

—— 時間的余裕と専門的指導に余力をもち  
冷静に音楽と向き合える場になることを願って

新山王政和（愛知教育大学）

## はじめに

これについて議論する際、学校選択の自由がある高校と中学校を同一に考えてはならない。

筆者は本学会第28回全国大会（1997）で「近未来、教育現場で学校吹奏楽はどう生き残るのか—今、学校吹奏楽を音楽教育の場へ、そして子どもの下へ—」というプロジェクト研究を行った<sup>1)</sup>。「勝つための部活」や「管理教育としての部活」から離れようと、多くの関係者が努力を重ねていた頃である。その後も関係者と接してきたが、そこで問題視されている多くは、次の2点が解決に向けた示唆になり得ると考える。

- ① 指導者も生徒も時間的な余裕を持って、冷静に音楽活動と向き合う
- ② 外部指導者等を活用して指導者は専門的指導に余力を持ち、冷静な音楽指導を心がける。

この2点を踏まえて中学校吹奏楽部が今後も永く続くことを願い、内包する問題を敢えて批判的な立場から8つの所感にまとめた。

## 1 既にあるからやめられない

吹奏楽や合唱等の部活動は、発足当初に期待されていた音楽や文化面での意義や教育的効果という意識は薄まり、「あるからやって当たり前」に陥しているとも言われている。例えば吹奏楽部の場合、2015年には中学校10,484校の内の7,213校（69%）が全日本吹奏楽連盟に加盟していることから<sup>2) 3)</sup>、中学校の多くでは「元々あること」を前提として体制が生まれ、「顧問として活動を滞りなくやること」が当然のことと考えられている。加えて保護者からも「毎日部活をやってもらわないと困る」という要望が増えており、全ての学校において多種の部活動を用意して生徒を参加させることが求められている。しかし少子化による生徒数減少とそれに伴う教員の減員が進む今、学校単位ではなく近隣の学校と合同で活動するスタイルの導入を、学校関係者だけではなくコンクールを主催する全日本吹奏楽連盟でも本格的に検討すべきである<sup>4)</sup>と考える。

1) 報告書は『音楽教育学』第27-4号（1998）に掲載され、後に論説資料保存会の『教育学論説資料』第18号（2002）にも選ばれた。

2) 文部科学省「文部科学統計要覧（平成28年版）」（2017年7月8日にアクセス）  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/002/002b/1368900.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1368900.htm)

3) 全日本吹奏楽連盟「すいそうがく」2017, No.202（2017年7月8日にアクセス）  
<http://www.ajba.or.jp/suisougaku202.pdf>

4) NHK視点論点「部活動顧問と働き方改革」（2017年2月9日放送）  
<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/262693.html>（2017年7月1日にアクセス）

## 2 「生徒が望んでいるから」という錯覚

### 2.1 生徒が求めているものと、指導者がやりたいこととの乖離

以前から続く「成果主義」も今では質が変わり、音楽的意識の希薄な指導者による適切ではない指導が問題視されている。特に、個性重視の下で育った多様な価値観を持つ生徒と、音楽的ではない活動や指導が乖離していることが喫緊の課題であろう。「音大に進むから吹奏楽部はやめる」「合唱部では誤った発声が身に付く」等の言葉が口にされて久しいが、これらに加えて「上の大会に進むことが自慢」「コンクールの結果が生き甲斐」等の教師側の願望と、「勝つこと」を求めてしまう保護者の気持ちとが絡み合っ、生徒不在の成果主義的な活動に陥ってしまう例を耳にする。しかし、これらとは相容れなく真剣に音楽と向き合うことを望む生徒が、止む無く音楽系部活動から離れなければならないという事態は看過できない。

### 2.2 そこへ何を求めているのか

「生徒が求めること①②」「指導者が重きをおくこと③④」「指導者の力量⑤⑥」により、中学校吹奏楽部の実態をAからHに分けてみたい。  
[生徒が求めること]

- ① 音楽に関する成長を求めている。
- ② ソーシャルスキルの成長を求めている<sup>5)</sup>。

[指導者が重きをおくこと]

- ③ 主として音楽面に重きを置いている
- ④ 主として音楽外に重きを置いている

[指導者の力量]

- ⑤ 指導者は、その分野に精通している
- ⑥ 指導者は、その分野に精通していない

[A：①－③－⑤] 音楽的な成長を求める生徒に対して、その分野に精通した指導者（外部指導者も含む）によって、音楽に重きを置いた指導が行われる理想的なタイプ。

[B：①－③－⑥] Aとの違いは音楽に精通する教員の不在である。適切な外部指導者を確保して、顧問教師と連携することが求められる。

[C：①－④－⑤] 生徒は音楽的な成長を求め、指導者もそれに応えるだけの力量を持っていないながら音楽面以外での成果を求められる、生徒も指導者も苦しむタイプである。コンクールの成績に関する内外からの圧力や、学校を挙げて生徒指導や生活指導等が求められることにより、音楽面での活動が薄くなってしまう。

[D：①－④－⑥] 生徒は音楽的な成長を求めているにもかかわらず、音楽分野に精通していない指導者が音楽外のことには重きを置いている、生徒が苦しむ捻じれタイプである。適切な外部指導者を配置すべきであろう。

[E：②－③－⑤] 音楽に精通する指導者が音楽面での活動を行いたいのに、生徒はそれを望んでいない、指導者が苦しむ逆捻じれタイプ。

[F：②－③－⑥] 音楽に精通していない指導者が、音楽面の成長を望まない生徒を相手に音楽的な活動を行なおうとする空回りタイプ。

[G：②－④－⑤] 指導者が音楽専門家としての力量を発揮できず自らの存在価値を見失い音楽系部活動から離れてしまうタイプ。人的再配置や近隣校との部の統合を検討すべきである。

[H：②－④－⑥] 音楽系部活動として存続させる意義は希薄であり、費用対効果の面からも部の整理・統廃合を検討すべきである。

以上のように、生徒の意識と指導者の意識をマッチングするためにも、適切に外部指導者を配置したり、教員の再配置も含めた近隣校との部の再編を検討したりすべきであろう。

5) ソーシャルスキルとは、一般的には「日常生活の中で出会う様々な問題や課題に、自分で、創造的でしかも効果のある対処ができる能力」と言われている。

### 3 メディアに作り上げられた吹奏楽部

近年の吹奏楽（ブラバン）ブームのきっかけは「スウィングガールズ」（2004）と、「笑ってコラえて！ 日本列島吹奏楽の旅」（2004）であろう。また吹奏楽部を舞台にした書籍類も増加し、筆者が知るだけでも次のものがある。

① 吹奏楽部を舞台にしたコミック（書名のみ）『ヒビキノBB男子校吹奏楽部ライフ』『うらバン浦和泉高等学校吹奏楽部』『青空エール』『放課後ウインドオーケストラ』『アンダンテ』『小椋山中学吹奏楽部』『ブラブラバンバン』『ブラスラブ』『水色時代』『暴走系吹奏楽列伝ブラボー』『さくら音楽隊』『たらのめ高校吹奏楽部』『SOULCATCHER(S)』『吹奏楽に恋をして』

② 吹奏楽部を舞台にした小説（書名のみ）『楽隊のうさぎ』『うさぎとトランペット』『ブラバン』『モデラートで行こう』『ビート・キッズBeatKids』『スィングガールズ』『天帝のはしたなき果実』『グラツィオーソ』『アインザッツ』『カナデ、奏でます』『チューバはうたうーmitTuba』『さよならの次にくる』『退出ゲーム』『空想オルガン』『初恋ソムリエ』『千年ジュリエット』『吹部』『響けユーフォニアム北宇治高校吹奏楽部へようこそ』『きんいろカルテット』『锚を上げてーぼくらのプラスバンド物語ー』『プラスデイズ』『碧空のカノンー航空自衛隊航空中央音楽隊ノートー』『ぼくらはみんなここにいる』

関係者の間では吹奏楽（ブラバン）がブームのように言われているが、これらの書籍で取り上げられているものは音楽的な内容に深く触れるものは少なく、吹奏楽の活況さとは、実はメディアや音楽産業によって作り上げられたものとも考えることもできる。

### 4 部活動の目的の変遷

中学校へ部活動が導入された当初は、「自主的、自発的な参加によりスポーツや文化、科学等に親しむことで、学校教育が目指す資質・能力の育成に資する」という目的に沿って、生徒へ多様な経験を提供することに重きが置かれていた。吹奏楽部の場合「国民体育大会」の開催に合わせて各地で吹奏楽部を整備したことが、音楽経験の地域間格差を狭めるだけでなく、保護者の経済状況に因る音楽教育の格差を補うことにも繋がった。これが昭和37年の東京オリンピックに向けた過度な成果主義から「勝つための部活」に変わり、昭和50年代以降には生徒指導の面での有効性が注目され、「非行を防ぐための部活」として管理教育の一方策に使われるようになった。そして今は、道徳面での指導を補う「人間性の陶冶のための部活」へ期待が寄せられている。これに加えて、経済界や産業界からは「イベントやコンクール産業としての部活」へ熱い視線が注がれている。

よって筆者は、前述した部活動本来の目的に沿って、中学校吹奏楽部が再び冷静な音楽活動を提供し得る場になることを望んでいる。

### 5 過熱化した部活動の問題を整理する

#### 5.1 過熱化の原因をさぐる

国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動等に関する実態調査」（2014）によると88.8%もの中学生が部活動に参加していることがわかる<sup>6)</sup>。その理由として次の3点が考えられる。

① 高校入試や大学入試だけではなく就職の際

6) 国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動等に関する実態調査（平成26年度調査）調査結果集計」（2017年7月3日にアクセス）<http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/107/File/05syuukei.pdf>

にも、基本的な生活習慣や規範意識が身に付くものとして部活動経験が高く評価される実状がある。そのため「入試や就職試験のために部活をする」という生徒は多く、「子供が部活をしていると安心する」という保護者も少なくない。しかし現実には、規則の多さや厳しさに辟易して本当に指導を必要とする生徒は参加しないか途中で辞めてしまうと言われている。

- ② 部活動参加の利点として、自己理解、自己実現、自己肯定感、意欲・関心・態度等の自己アイデンティティに関する面の育成や、協調性、他者理解、コミュニケーション、計画立案力や問題解決能力、段取り力などのソーシャルスキルに関する面での育成が挙げられている。
- ③ 競う文化や成果を求める気風に起因する勝利至上主義と、その成果を売りにしようとする学校や地域等からの外圧。それらを盛り上げる部活動関連産業やイベント産業の扇動。

## 5.2 部活過熱化を生徒の側から整理する

吹奏楽部で問題として考えられることに、長時間の拘束と無思考的な活動、言葉によるハラスメントが挙げられる。

- ① 半ば強制的に長時間に亘って拘束されることが問題である。放課後の練習に加えて朝練が行われ、行事やコンクール前には昼練まで課されると言う。運動部の場合は、体力的限界や熱中症対策等から活動時間が制限されるが、吹奏楽部の場合は個人練習・パート練習・合奏を通して長時間活動し、土休日や夏休みには半日から丸一日練習することもある。本来、生徒の自主的かつ主体的な活動であるはずの部活動が、参加の自由度を奪われた上で「みんなでやる」という集団意識の下で事実上義務化していたり、協調性の下に部員同

士が互いに同調圧力を掛け合ったりすることが問題であろう。

- ② 指示されたことだけを盲目的に行うことを良いこととする勘違いが問題である。思考力を活性化させる大切な思春期に、もし部活動において思考停止状態に陥っているとしたら、生徒の自立を妨げている危険性を否定できない。吹奏楽部の場合、「指揮棒一本で演奏を変える」等の、生徒から「試行を伴う思考・判断・表現」を奪うような指導は慎むべきであろう。ちなみにプロ指揮者は演奏中、異口同音に「アイデアのある音」を求め続けると言う。
- ③ 指導者のハラスメント行為を黙認してしまう「部活体質」が問題である。今では、心の問題として潜在化しやすい暴言によるハラスメントが深刻である。加えて、生徒の側にも「自分がターゲットでなければ関わりたくない」という傍観者的な心理や、アメとムチの指導から生じる「暴言は熱心さの表れ。捨てられるよりマシ」と自らへ言い聞かせるセルフ・マインドコントロール、これらを耐え抜いた時の達成感やそれによって得た成就感が活動の目的にすり替わってしまう錯覚、そしてこれらのことを中学生の頃から刷り込んでしまうことが問題である。

## 5.3 部活過熱化を教師の側から整理する

「部活をやりたくて教師になった」という言葉を聞く。かつて筆者も吹奏楽指導を夢見て教師をめざしたが、「賞の色（金銀銅）」に執着することに違和感を覚え、客観的に吹奏楽と向き合うことで次の点を確認することができた<sup>7)</sup>。

- ① コンクール強豪校より、人数が少ない弱小校の方が、生徒の自己アイデンティティやソーシャルスキルは優れていることが多かった。

7) 新山王政和 (2013) 『日本の学校吹奏学を科学する!』スタイルノート、第1章から第3章

- ② 指導力の高いカリスマ教師が指導する強豪校より、そうではない音楽教員が指導する弱小校の方が生徒の音楽的成長は大きかった。

よって「カリスマ的指導」が必ずしも生徒の音楽的成長や自立に繋がらない現実を冷静に受け止め、個性重視の時代に育った生徒との向き合い方を慎重に検討し直す必要があると考える。そして、真剣に音楽を学び音楽を愛する教員が、過度な成果主義による「勝つための部活」に飲み込まれ、吹奏楽部の指導から離れてしまうことを防がなければならない。

- ③ 寝る間も削って指導し、コンクールでよい結果を出せることが優れた教員の証とする勘違いが問題である。部活動を通して生徒の人間的成長を支えることも大切だが、授業を通してそれらを行うことが教員の本来の業務である。

#### 5.4 部活動過熱化の原因は社会にもある

経済産業省が2017年2月に公表した「世界が驚くニッポン! Wonder NIPPON!」の「日本人独特の自然観『間』を見出す『道』を求める『和』をなす」を説明した部分には、過熱化した部活動を是認し、それを目的に部活動が行われているかのようにも読み取れる文章がある<sup>8)</sup>。

しかし『道』の精神は、かたちを変えながら、脈々と受け継がれている。たとえば、部活動に励む少年少女は、監督やコーチの指導のもと、懸命に練習に打ち込み、全力を心掛け、何より礼儀作法を教え込まれる。ここには、単純な技能向上としての訓練を超えた、

『道』の精神が宿っている。その練習風景を見た外国人は、驚かすにはいられないという。日本人のDNA、無意識には、いまなお『道』が宿っているのだ。(p. 37)

日本の教育現場では、スキルや知識だけでなく、礼儀や心構えなど、『道』に通じる精神が重視される。教育によって、『道』は日本社会の隅々まで浸透してきた。(p. 39)

現実には、厳しい部活動を経験し、それを乗り越えることを称賛する雰囲気は根強い。吹奏楽部で掲げていた標語と同じものが、ブラック企業の事務所にも掲げられていたという話は笑い話では済まされない。これらのことから、過熱化した部活動が存在する原因は、学校側だけではなく、それを「必要悪」として黙認し擁護してしまう社会の側にもあると考える。

## 6 教師の多忙化の原因を整理する

### 6.1 教師の勤務時間の実態

本当に教師が多忙化しているのか確認するために、「教員勤務実態調査（平成28年度）の集計（速報値）について」から、中学校教諭の一週間当たり学内総勤務時間を抜粋した<sup>9)</sup>。

H18年度	H28年度	増加
58時間06分	63時間18分	5時間12分

既に平成18年度の時点で、一週間当たりの法定労働時間40時間を大きく超える58時間も学校内での勤務を強いられていたことが問題である。これが平成28年度には、本来割増賃金

8) 経済産業省「世界が驚くニッポン!」(2017年7月3日にアクセス)

<http://www.meti.go.jp/press/2016/03/20170308001/20170308001-1.pdf>

9) 文部科学省「教員勤務実態調査（平成28年度）の集計（速報値）について」(2017年7月8日にアクセス)

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/\\_icsFiles/fieldfile/2017/06/23/1387211\\_05\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/fieldfile/2017/06/23/1387211_05_1.pdf)

を要する60時間を超えて63時間も勤務している。

次に、学校内で従事する25項目の業務から、所要時間の多い順に5つを抽出した。

平 日	土 日
授業（3時間5分）	部活・クラブ活動（2時間10分）
授業準備（1時間26分）	授業準備（13分）
生徒指導（1時間2分）	成績処理（13分）
部活・クラブ活動（41分）	学校行事（12分）
学年学級経営（38分）	学年学級経営（4分）

ここには2つの問題がある。

- ① 土休日の学内超過勤務時間（3時間22分）の過半を部活動が占めていることから、これが慢性的な休日出勤の原因になっていることがわかる。特に吹奏楽部の場合は、平均を超えて土日曜に2時間42分（平日は47分）も勤務していることが報告されている。ただし、この調査が「2016年10月～11月のうちの連続する7日間の勤務実態の記録」から集計されていることを考えると、コンクールの時期や各種演奏会の時期には相当これを上回るものと思われる。
- ② 生徒の活動時間はここで挙げられた時間より長いことから、部活動の多くの時間を生徒は指導者不在で活動していることになる。この指導者不在の常態化が、5.2で述べた部員同士が互いに長時間拘束し合ったり同調圧力を掛け合ったりする原因にもなっていると考えられる。

## 6.2 教師の多忙化の原因

教師の多忙化が加速化した理由として、主に

2つのことが指摘されている。まず2006年度に導入された義務教育学校教員の賃金に関わる「総額裁量制」に関するものである<sup>10)</sup>。これは国庫負担の総額内であれば各自治体が教員数を決めることができる制度で、これにより正規教員2人分の予算で講師を3人雇ったり、非常勤講師を複数人雇用したりすることも可能になった。しかし授業以外の業務に非常勤講師を当てることは難しいため、結果として正規教員の業務負担が増大することへ繋がっている。

そしてより深刻なのは、そもそも経済産業界の経営者側が、長期蓄積能力を有する無期契約正社員を全体の3割程度に抑えることで採算が成り立つと考えている上、被雇用者側も介護等の様々な事情から多くの制約を受けない働き方（期間や労働時間を限定した契約、単年度年俸制）を選択する者が少なくないことである。

これらのネガティブな流れを断ち切り、正規教員が長時間労働から解放されるためには、勤務の在り方そのものを変えていくシステムづくりが必要であろう。この議論の俎上に「教員本来の仕事の精選（チーム学校）」と、それに実効性を持たせるための「部活動指導の外部委託（部活動指導員）」が挙がってきたと考えられる。

## 6.3 今後の方向性

部活動における外部指導者の状況について、「ベネッセ教育情報サイト2017/07/23」から必要な部分を抜粋する<sup>11)</sup>。

- ① 「外部指導者の活用の拡大のための特別な措置」を設けている市区町村は28.5%
- ② 「顧問の複数配置の促進」を講じている市区町村は30.6%

これは、実際に学校を運営するレベルでは実

10) 文部科学省「義務教育費国庫負担制度について」（2017年7月8日にアクセス）  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gimukyoiku/outline/001/005.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gimukyoiku/outline/001/005.htm)

11) ベネッセ教育情報サイト「部活動の見直し、なかなか進まず2017/07/23」（2017年7月29日にアクセス）  
<http://benesse.jp/kyouiku/201707/20170723-1.html>

効性のある対策が講じられていない、または具体化していないことの証左であろう。

この状況を文科省はどのように捉えているのか、「教育再生実行会議第十次提言・主なポイント『自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上』」から読み解いてみる（下線は赤文字で強調されている部分）<sup>12)</sup>。

地域の教育力の項では、「学校、家庭、地域の交流の場として学校を活用し、地域の教育力を学校に呼び込む」とし、「地域学校協働活動の推進」や「コミュニティ・スペースとして学校を整備・活用」すること等が謳われている。これにより、教育活動の全てを学校が丸抱えしてしまった現状を改め、今後は地域の教育活動の拠点としての役割を学校が担うことになる。

そして学校部活動改革、学校事務の効率化等を通じた教師の負担軽減の項では、「『学校による部活動』から『地域による部活動』に転換するべく、部活動指導員の配置の推進のほか、指導者の資格の在り方や地域単位での部活動を行なえる環境づくりについて検討」することを提言している。これにより、1つの学校の中だけに閉じた部活動を改め、今後は地域や複数の学校と一緒に活動したり、専門分野に秀でた部活動指導員（外部指導者）を学校外へ広く求めたりすることになる。既に岐阜県多治見市では平日の下校時刻以降と土休日は地域のジュニアクラブとして活動しているという<sup>13)</sup>。また筆者も、諸外国の吹奏楽部指導者の例や、かつてM県S市で試行された部活動派遣外部指導者の事例について報告を行っているので参照されたい<sup>14)</sup>。

## 7 指導者に求められる資質や能力

顧問や外部指導者の資質や能力も大切である。朝日新聞デジタルのフォーラム「中学校の部活」に関するアンケート調査で<sup>15)</sup>、「問3：今の中学校の部活動で改善してほしいものは何ですか（2つまで選択可）」によると、第1位の「活動時間（51.6%）」に次いで「指導者（42.2%）」が挙げられている。事実多くの中学校では6.2に記した「総額裁量制」に抛り音楽科教員が講師や非常勤へ置き換えられたことから、吹奏楽部の顧問を他教科の教員が担当することが増えている。これにより2.2で整理したとおり、音楽的に優れた生徒が集まる集団になればなるほど、音楽的に十分ではない指導に対する不満が大きくなることも考えられる。これを改善するためにも、適切に外部指導者を登用すべきであろう。

しかし音楽に精通しているだけでは、部活動指導を担うことは難しい。一時期、人と向き合うために必要な洞察力やソーシャルスキルが重視されたが、その後それらの能力だけでは人を育てるためには十分でないことが知られるようになり、今では次のことが求められている。

- ① 双方向コミュニケーションの力（協働力）
- ② 指導者自身の「ゆとり」（俯瞰力）
- ③ 管理統制から自立支援へ（コーチング）
- ④ 生徒の「できていること」を見逃さず、その成長を具体的な言葉を用いて伝える力

これは音楽レッスンと同じである。指導者自身が受けた経験と結びつけながら、生徒と向き合うスキルを高める努力を継続してほしい。

12) 文部科学省「教育再生実行会議第十次提言主なポイント『自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上』」（2017年7月9日にアクセス）[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/\\_icsFiles/afieldfile/2017/06/23/1387211\\_06\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2017/06/23/1387211_06_1.pdf)

13) 前掲資料4

14) 前掲書7, 第15章

15) 朝日新聞デジタル「中学校の部活動」（2017年7月1日にアクセス）<http://www.asahi.com/opinion/forum/025/>

## 8 音楽を大切に部活動であるために

音楽が本来持っている「責任ある自由度」や「絶対的な正答が存在しない冗長性」、つまり多くの人々にとって価値あるものとして共有できる最小公倍数や、共通に感じ取ることのできる最大公約数のような普遍性を求めて冷静に音楽活動を行う場、そしてそれを演奏で表現したり感じ取ったりする不易流行を楽しむことのできる場、そのような冷静に音楽と向き合える場として吹奏楽部が存続することを願っている。

平成29年度文部科学省学習指導要領では「特別の教科『道徳』」が新設され、人格形成や自己実現、社会性、社会規範等に関する指導が、これまでより充実して行われることになる<sup>16)</sup>。これを機会として、活動内容についてバランスの適正化を図り、中学校吹奏楽部では「冷静な音楽活動」に向かう指導を大切にしたい。

## おわりに

様々な問題を内包しながらも永く続いてきた吹奏楽部は、日本の学校教育の中で重要な役割を果たし、多くの音楽人を輩出してきた。しかし少子化が進む今、生徒の減少に伴う教員減によりその職務は煩雑化・多忙化を極め、これまでと同じ指導スタイルを維持することは難しい。それを解消する方策として部活動指導員の導入が提言されたが<sup>17)</sup>、音楽を通して多くを学び、専門を極めた音楽大学出身者が、冷静な音楽活動を提供することのできる部活指導員として活躍することを望んでいる。なお今回は触れなかったが、大音量に曝される「耳の保健（難

聴）」への適切かつ早急な対応も課題であろう。

## 【参考文献】

- 内田良（2017）『ブラック部活』東洋館出版社。
- 大内孝夫（2012）『音大卒は武器になる』ヤマハミュージックメディア。
- 神谷拓（2015）『運動部活動の教育学入門』大修館書店。
- 島沢優子（2017）『部活があぶない』講談社。
- 鈴木威（2010）『子どもは体育会系で育てよう！』阪急コミュニケーションズ。
- 竹内俊一・本田礼・本田優子（2014）「学校吹奏楽部の活動に関する実態調査（1）—アンケート調査を通して—」『兵庫教育大学研究紀要』第44巻，pp. 111-117。
- 竹内俊一・本田礼・本田優子（2014）「学校吹奏楽部の活動に関する実態調査（2）—アンケート調査を通して—」『兵庫教育大学研究紀要』第45巻，pp. 101-110。
- 竹内俊一・本田礼・本田優子（2015）「学校吹奏楽部の活動に関する実態調査（3）—アンケート調査を通して—」『兵庫教育大学研究紀要』第46巻，pp. 99-109。
- 中澤篤史（2017）『そろそろ、部活のこれからを話しませんか』大月書店。
- 前屋毅（2017）『ブラック化する学校』青春出版社。
- 百瀬恵夫・篠原勲・葛西和恵（2012）『体育会系はなぜ就職に強い？』創英社。
- 吉田典生（2009）『なぜ、「できる人」は「できる人」を育てられないのか？』日本実業出版社。
- NHK「クローズアップ現代+ No.3847（2016年8月1日放送）」<http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3847/1.html>

16) 文部科学省「中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編」（2017年8月5日にアクセス）

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2016/08/10/1375633\\_8.pdf#search=%27%E7%89%B9%E5%88%A5%E3%81%AA%E6%95%99%E7%A7%91%E9%81%93%E5%BE%B3%27](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/08/10/1375633_8.pdf#search=%27%E7%89%B9%E5%88%A5%E3%81%AA%E6%95%99%E7%A7%91%E9%81%93%E5%BE%B3%27)

17) 文部科学省「部活動指導員の概要」（2017年7月9日にアクセス）[http://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/shingi/013\\_index/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile/2017/05/29/1386194\\_04.pdf#search=%27%E9%83%A8%E6%B4%BB%E5%8B%95%E6%8C%87%E5%B0%8E%E5%93%A1%27](http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2017/05/29/1386194_04.pdf#search=%27%E9%83%A8%E6%B4%BB%E5%8B%95%E6%8C%87%E5%B0%8E%E5%93%A1%27)